

イエスは教会を建てたか

マタイ福音書一六章一七以下の釈義的研究のメモ

加藤 邦雄

I

イエスに「教会」についての一定の思想があったか否か、について論じようとする時、一度はどうしても、マタイによる福音書一六章一八にある「そこで、わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう」云々なる句を取り上げねばならぬ。キリスト教々義として「教会」なるものを取り上げようとする時、この句をめぐる、ローマ・カトリック教会の解釈¹⁾、プロテスタント教会のそれ、さらにいわゆる無教会のそれが並存しているように見える。すなわち、ここに「教会」なる語をめぐる、三種類の解釈があるように見える。

第一に、ローマ・カトリック教会の解釈にしたがえば、この「教会」とは聖なる公同教会として正しい伝承を受け嗣いだローマ・カトリック教会のみが、それであると言う。

しかし、第二に、宗教改革者たちとその伝統の中に生きているプロテスタント教会の多くの人々は、この「教会」とは、一六節にあるように「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と言う「信仰」を「告白」する教会を意味す

イエスは教会を建てたか

イエスは教会を建てたか

る、と主張する。第一のローマ・カトリック教会の主張する所によれば、「教会」を教会たらしめるものは、ペテロより始まる、いわゆる、使徒伝承にあるが、第二のプロスタント教会の主張によると、教会のよって立つものは、「信仰告白」である。

第三に、ローマ・カトリック教会の立場にもよらず、また、プロテスタントのそれにもよらないで、この個所における「教会」なる文字および、これに関連する句が一切歴史性をもたぬもの、すなわち、おそらく挿入されたものであらうと推定する立場がある。このように、一六章一七以下の句の信拠性を疑う聖書学者の意見に対して、いわゆる無教会主義に立つ人は、大体において賛意を表しているようである。

もし、マタイ福音書一六章一七—二〇にある句の歴史的信拠性が稀薄であると、聖書学によつて客観的に立証されるならば、イエスに「教会」の思想がなかった、と結論を下すことは早急であるにしても、少くとも、この句を唯一の根拠としてイエスの教会観を展開することは相当困難になるであらう。それ故に、マタイ福音書一六章一七—二〇の信拠性の問題に触れなければならぬ。

この句と平行する記事は、マルコ福音書で八章三〇の次ぎに見当らない。また、同様にルカ福音書八章二一の次ぎにも見当らない。このように、マタイ福音書一六章一七—二〇の記事が、同福音書のみに見出されて、マルコ福音書およびルカ福音書に見出されない、と言う事実をいかに理解したらよいか。これについて、最も簡単な答えは次のようなものであらう。マルコ福音書およびルカ福音書になくて、マタイ福音書のみに見出せる記事に信拠性が稀薄であらうと。しかし、このような推論の仕方に対して、われわれは、もう少し慎重でなければならぬ。

もしも、マタイ福音書の古い写本の中に、一六章一七—二〇の個所を全く欠如しているものが発見されるならば、この個所は確かにマタイ福音書が書かれた後に、その著者以外の誰かがそれを挿入したに相違ない、と大体において

断定して大誤はないと思う。しかしマタイ福音書一六章一七—二〇を欠如している写本はいまだ一つも発見されていない。それ故に、マタイ福音書一六章一七—二〇は、少くとも現形の同福音書には本来あった文句であると考えざるを得ない。それは、古くは Pummer がその著⁽²⁾の中で指摘したように、マタイ福音書一四章二八—三一や一五章一五などと同様に、マタイ福音書の著書が入手した資料によると考えられよう。

マタイ福音書一六章一七—二〇のみならず同章二三—一七において、マルコ福音書やルカ福音書の平行記事の中に見出されない文字があるが、次のような文字は、い、わゆる、*semitism*をあらわすものではないかと思われる。すなわち、

「バヨヨナ・シモン」

「ペテロ……岩」

など、と言う語である。

「バルヨナ・シモン」は、ギリシヤ語原典では次のようになってゐる。

Simon Bariona

「シモン」はヒブル語やアラム語の「シメオン」である。「バルヨナ」は、言うまでもなく、ヒブル語ではなくてアラム語で言う「ヨナの子」である。そこで、イエスがペテロに呼びかけた時、この弟子の名をアラム語で呼んだことがわかる。ただし、ヨハネ福音書二一章一五などでは「ヨハネの子シモンよ」となっているが。

「ペテロ」は、ギリシヤ語では Petros であつて、「岩」は Petra である。そこでペテロスとペトラでは音がよく似ているので、イエスが、このように語つたであろう、としばしば説明される。しかし、そのように断定を下す前にイエスが何れの国のことばを語つたかを一応検討して見なければならぬ。すなわち、ギリシヤ語か、ヒブル語か、ア

イエスは教会を建てたか

イエスは教会を建てたか

ラム語か、その中のいずれかであろう。ヒブル語で「岩」はツウル *tsur* か、セラア *selah* であるが、これとペテロとは音が全く似ていない。しかし、アラム語でケーファー *kepha* は「岩」である。他方、新約聖書の中に「ケバ」なる名がいくつか出てくる。すなわち、ヨハネ福音書一章四二、コリント一書一章一二、三章二二、九章五、一五章五、ガラテア書一章一八、二章九、一一、一四である。この中で、ヨハネ福音書一章四二の表現には注意を払う必要がある。

「あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケバ（訳せばペテロ）と呼ぶことにする」

もし、右の句をそのまま信用すれば、シモンなる弟子にイエスが、ペテロでなくて、ケバなる呼び名を与えたことになる。それを福音書著者がペテロとギリシヤ語に訳したというのである。このシモンが生前、ケバとのみ呼ばれたか、それとも、ケバともペテロとも呼ばれたか、その判断は容易でないが、カイザリア・ピリピにおいて、イエスがシモンに向って、「ケーファー」と呼んだとすれば、その語はそのまま「岩」であったことになる。（アラム語の一種と言うか、その姉妹語であるシリア語新約聖書ではペテロをすべて例外なく、ケーファー *kepha* と書いていてアラム語のケーファーと全く同じ語である。）

このように、マタイ福音書一六章一七―二〇の中には、アラム語でイエスが語ったと想像される文章が推定されるので、そのことを *scritism* と称したい。なぜ、このようなことを特別に取り立てて論ずるかと言うと、この個所の資料があったとすれば、それは現存のマタイ福音書（ギリシヤ語で書かれしる）の背後にあった、アラム語による伝承を反映していると考えられるからである。

この個所の資料が、どの場所に伝えられた伝承によるか。ある人は、それはシリアのアンテオケにおける伝承に由来すると考えるが、またある人は、それは恐らくエルサレムを中心とした伝承に由来すると想像する。しかし、^(三)い

すれにしても、この個所の文章が相当古い伝承を資料としてゐることに、疑いがないのであろう。現存のマタイ福音書が成文化された年代を、かりに、八十五年位とすれば、この個所の資料である、いわゆるM資料のそれは六五年頃であつたと、推定されよう。言うまでもなく、それは推定であるが、M資料が現存のマタイ福音書の成立より古いことには間違いない。したがつて、マタイ福音書一六章一八—二〇が、マルコ福音書（それはM資料と大体同時に成立したと考えられる）や、ルカ福音書（M資料より大分遅れて書かれた）の中に見出せないからと言つてただそれだけの理由でその歴史的信頼性を疑ふことは許されない。(四)

註

(一) 最近の、エルサレム聖書研究所 (L'École Biblique de Jerusalem) から出版された *La Sainte Bible, traduite en français sous la direction de L'École Biblique de Jerusalem* でマタイ福音書一六章一八—二〇あたりに次のような註を加えている。

L'Évangé catholique tient que ces promesses éternelles valent, non seulement pour la personne de Pierre, mais aussi pour ses successeurs;

(i) Plummer, *An Exegetical Commentary on the Gospel of Matthew*, P. 227. "Like the other passages in which S. Peter is conspicuous (14: 28, 15: 15), it probably belongs to traditions which were current in the Church of Jerusalem.

(ii) マタイ福音書一六章一八以下の資料は、Streeter 氏 *The Four Gospels* (pp. 258-259) の中々次のように説明した。

In that case "Thou art Peter" will have been derived, not from M, but from the local traditions of Antioch the headquarters of this intermediate party. But we shall refer to M the doublet of this saying, Mt 18: 17, which confers the power "to bind and loose" upon the Ecclesia, that is, on the righteous remnant of the People of God, of which the Jerusalem Church was the natural headquarters and shepherd.

(iii) この個所の歴史的信頼性については、未解決の点がなお残されてゐるが、Kittel, *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament*, Bd III, S. 523. 以下に、同様に最後の解決はまた与えられてゐる。

Daraus können zwei Folgerungen gezogen werden: 1. Mt 16: 17-19 ist nachträglich in den Mt Text eingeschoben. Oder

イエスは教会を建てたか

イエスは教会を建てたか

2. Mit selbst oder auch ein Vorgänger, dem er gefolgt ist, hat diese "unechten" Worte in einem Mk und bei Lk vorliegenden ursprünglichen, auf Jesus zurückgehenden oder wenigstens ursprünglicheren Text eingeschoben. Die erstgenannte Folgerung ist zu grobschlächtig um sonderlich ernst genommen werden zu können. Gerade bei einer so wichtigen Stelle ist grosse Vorriht am Platze. In anderen Fällen wird ja keineswegs eine Überlieferung für unecht erklärt, weil sie eine Sonderlieferung ist.

II

「教会」を論ずるとき、しばしば、新約聖書における「教会」の原語であるエクレーシア *ekklēsia* の語源から論じ始める人が相当あるが、そのことは、ギリシヤ語のエクレーシアの語義を一応明らかにしても、教会の本質を明らかにするために不可欠のことではない。なぜならば、マタイ福音書のみエクレーシアなる語が二回（一六章一八と一八章一七）用いられていて、マルコ福音書、ルカ福音書、ヨハネ福音書のいずれにも、一回も、用いられていない、と言うこの語の用いられた回数に問題があるよりは、このエクレーシアなる語が外国語であるからである。マタイ福音書は言うまでもなくギリシヤ語で書かれているが、イエスは恐らく、ギリシヤ語を用いてケパ（ペテロ）に語らなかったと想像すると、このエクレーシアは元来何と言う語であつたらうか。それを直接に決定する材料はどこにもないが、いくつかの語を探し出して来て、その中のどれであつたらうかと、一応は検討を加えて見たい。

第一に手掛りになるのは、旧約聖書のギリシヤ語訳である。それによると、エクレーシアと訳されているヒブル語は主としてカーハール (*qahal*) である。たとえば、次のような個所に用いられている。申命記九章一〇、一八章一六、二三章一、二、三三章三〇、詩篇二一篇二二、二五、二五篇五、三四篇一八、三九篇九、八八篇五、一〇六篇三二、一四九篇一。以上の所では、カーハールは、イスラエルの「会衆」または「集会」の意味である。イスラエルは

神の民であった。神の民が幕屋を中心に、あるいは、エルサレム神殿を中心として集るとき、それは、カーハールである。それが散会しても、イスラエルは神の民としてはカーハールである。

新約聖書をヒブル語に訳した、デーリツチは、マタイ福音書一六章一八のエクレーシアをカーハールと訳した。もし、これをそのままアラム語に訳せば、カーハールはクヘーラー (qehalah) となる筈である。

第二に手掛りとなるのは、旧約聖書において、カーハールと非常に内容がよく似ているエーダー (Edar) なる語である。エーダーは、ギリシヤ訳旧約聖書では一度もエクレーシアとは訳されなかったが、カーハールと同様に、イスラエルの会衆あるいはその集会として用いられていることが多い。その場合ギリシヤ語ではスエナゴギー synagoge (この語は、ユダヤ教における「会堂」と同じギリシヤ語であるが) と訳された。たとえば、出エジプト記一二章三、六、一九、四七、一六章一、二、九、一〇、二二、一七章一、その他、レビ記四章一三、一五、八章三、詩篇七篇三、一五篇四、二一篇一、八五篇一四、その他、などがある。

アラム語の姉妹とも言うべき、シリア語訳の新約聖書を開けて見ると、マタイ福音書一六章一八その他における「教会」はエードター (Edta) と訳されているが、シリア語のエードターは一見してわかるように、ヒブル語のエーダーと全く同じである。

第三に、もし、イエスがアラム語で語ったとすれば、クニッシュター knishtha であつたらうと言う者がある。(一) アラム語のクニシュターはシリア語ではクヌーシュター knusha である。いずれも「共に来る」あるいは「共に集る」なる動詞から変化した名詞で、「集会」「会衆」「会堂」「教会」「教会」を意味する。この語はヒブル語旧約聖書の中には一回も用いられていないが、ただ、カーナス (共に来る、集める) なる動詞の形があり (伝道三章五、エステル書四章一六、歴代上二二章二) またアラム語である同じ意味の動詞クナシュ (ダニエル書三章二三、二七) が用いら

イエスは、教会を建てたか

イエスは教会を建てたか

れしいるのみである。

さらに、第四のヒブル語とアラム語を挙げる者もないが、普通は、以上のような三種類の語の中にいずれかであったと考える。そして、そのいずれもが、旧約における「イスラエルの会衆」なる句によってあらわされていることと、不可分の関係にある、あるいは、その系譜によって理解されるべき内容であったらう、と想像される。

註

- (一) Kittel, Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament. Bd. III. S. 522. ぞ Schmidt は、カーハール、クニーンシュター、クヌーンシュターなるヒブル語やアラム語を挙げてゐるが、マタイ福音書一六章一八のエクレーシアはカーハールであると、最後に断定を下すことを避けている。Flew, Jesus and His Church, p. 90 において、この書物の著者は、イエスが、マタイ福音書一六章一八に用いた「教会」なる語が、何であつたかを、シニットの説を引用しつつ次のように述べる。Jesus may well have used this Hebrew word, or the Aramaic qhala. Schmidt has advanced an attractive suggestion that the word used was kenishta, the commonest Rabbinic word for 'synagogue'. The Sinaitic Syriac version translates ecclesia by kenushta. It is possible that this word was used not only for the local community meeting in a particular synagogue, but also the whole 'Israel of God'.

III

エクレーシアが何と言うヒブル語あるいはアラム語の訳語であるにしても、エクレーシアは、旧約のイスラエル、あるいはイスラエルの会衆からの系譜を引きつつも、さらに、イエスによって新しく「建てられる」ものである。あるいは、イエスを中心として、その弟子たちによって新しく組織されるイスラエル、すなわち、新しい民である。イスラエルなる語を、マタイ福音書の中から拾ひ出して見ると次のように一二回ある。

二章六一「わが民イスラエルの牧者」

二二章二〇「イスラエルの地」

二二章二一「イスラエルの地」

八章一〇「イスラエル人の中にも」

九章三三「イスラエルの中で」

一〇章六「イスラエルの失われた羊」

一〇章二三「イスラエルの町々」

一五章二四「イスラエルの失われた羊」

一五章三一「イスラエルの神」

一九章二八「人の子が……イスラエルの十二の部族をさばくであろう」

二七章九「イスラエルの子ら」

二七章四二「イスラエルの王」

ここに、マタイ福音書の中に見られる「イスラエル」がことごとく、直接的にそのまま、イエスの「エクレシヤ」であるとは断言できないが、イスラエルとは神の民であり、信仰ある民であり、したがって、イエスとその弟子たちとはこのイスラエルの家につかわされていた。それ故にこそ、終末の日に、人の子イエスは十二弟子と共に十二の位に坐してイスラエルの十二部族をさばくと言われた。

イスラエルと関係の深い、さらに一つの語は「民」*people*なる語であって、マタイによる福音書一章二一「かれは、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となる」、あるいは二章六「おまえの中からひとりの君が出て、わが民イスラエルの牧者となるであろう」と言うような句は、イエスがキリストであることを示す語であるが、いずれも、イ

イエスは教会を建てたか

エスをその救主あるいは君とする神の民の本質をあらわしている。

そこで、次のように論を展開することが許されないのであろうか。マタイ福音書の中にエクレーシアなる語は、その一六章一八と一八章一七との二カ所にしか用いられていない。われわれは、この福音書にのみエクレーシアなる語が用いられていて、マルコ福音書やルカ福音書における平行記事にその語の発見されないことを、一応問題として取り上げねばならぬと知っている。しかも、それだけの理由で、マタイ福音書におけるエクレーシア章句の歴史的信憑性を疑うことはできない、と主張するのみならず、むしろ、このようなエクレーシア章句の中に相当の歴史的信憑性のあることを主張する者である。

しかし、われわれは、一步ではなく、かりに、百歩をゆずって、マタイ福音書におけるエクレーシアの歴史的信憑性を否定されたと仮定しても、マタイ福音書の中に、エクレーシアとその内容において深い関連をもつ「イスラエル」あるいは「民」なる表現が多くある事実を指摘したい。シュタウファアの「新約聖書神学」(1) 第四部、三八章において、この著者は新約聖書において教会をあらわす語をエクレーシア以外に「神の民」「キリストの群」「神の植えたもの」「神の建物」「女性としてのエクレーシア」「キリストの体」なる六種類の表現のあることを一つ一つ例証したが、神の民については次のように語った。「わたくしはあなたがたが神となり、あなたがたはわたくしの民となるであろう——このように旧約宗教とその歴史との基本的な言葉は書いている。(レビ記二六章一一、エゼキエル書三七章二七、ゼカリヤ書八章八) そのことは終末文学の時代にも生き生きとその生命をふきかえした。……教会は神の民であり、神の所有する民である……」ここで、シュタウファアが「神の民」とキリスト者の群を呼ぶとき、一般的の意味でのイスラエル民族史を指すのではなく、救済史 *Heilsgeschichte* から見たイスラエルを意味することは、

言うまでもない。(2)

- (一) Stauffer, *Theologie des Neuen Testaments*. Eng. tr. *New Testament Theology*. 教会を意味する $\tau\omicron\upsilon\chi\omicron$ の語を著者は用いるが、その代表的な引用箇所は次のごとくである。エクレシア (マタイ一六章一八) 神の民 (コリント二書六章一八、ペテロ一書二章九、黙示一章六)、キリストの群 (ペテロ一書二章二五、五章二、ヨハネ一〇章)、神の植えたもの (マルコ二章一以下、コリント一書九章一七、ヨハネ一五章一以下)、神の建物 (マタイ四章五、五章三五、五章三五、ヘブル一三章一四)、女性としてのエクレシア (マタイ二二章一以下、二五章一以下。黙示二二章二以下)、キリストの体 (ローマ一三章四、コリント一書一三章一、二章、コロサイ一八、二四、二章一九、コリント一書一〇章四一五、一三章一三、一三章一三、ヨハネ一五章一以下。)
- (二) 救済史としてのイスタエル史については次の箇所を引用せよとシュタウファーは言う。ガラテア六章一六、ローマ書九章六、黙示録二章九、ヘルマス牧者、比喩巻一七章一、ルカ三章八、ローマ書四章一六一一七、ガラテヤ書三章八、ヘブル書二章一六。前掲書二九五頁の註を参照。

IV

ヨナの子シモンはイエスからケバ (ペテロ) すなわち「岩」と呼ばれていた。そして、この「岩」の上に、イエスは自分の教会を建てると言われた。その頃も、それ以前の古い時代においても、東方諸国において、神の国は偉大な岩の上に建てられるものである、としばしば考えられていた。神の国は、しばしば、天に達するような大きな塔として表現されていた。そのような塔は当然大磐石の上に建てらるべきであるとされた。また、ユダヤ人の間において、エルサレム神殿はシオンの山に立てられており、神殿の土台には大きな石が用いられていた。このような、当時の、あるいは昔からの長い間の、神の国の形についての表現の仕方から見ると、教会が岩の上に建てられるとの表現はきわめて自然であった。(一) また、使徒たちの時代になって、教会はしばしば大建築物として描かれたが、その場合、当然、その土台の石が何であるかに触れている。

イエスは教会を建てたか

シユラッターは「福音書著者マタイ」なるきわめて独自性の豊かなマタイ福音書の研究の中で、大体次のようなことを述べている。すなわち、イエスは十二弟子と共にいたガリラヤにおける時期をここで終了して、これから南下して首都エルサレムに向おうとしている。そこで十字架につけられることが必然的に予想されるが、その時、エルサレムと言う大きな都とそこにある神殿というものが当然思い浮ばれる筈である。そこで、在来エルサレム神殿を中心とした神の国の映像と、これからイエス御自身が十字架と復活とを通して建てる教会のそれとが対比的に描かれたと考えられる。(二)

この「教会」を建てる者は、言うまでもなく、イエス御自身であるが、その場合、建物の土台である岩がケバであるとはどのような意味であるか。これについては、キリスト教史上いつも同じような神学論がくり返えされて来た。すなわち、ローマ・カトリック教会は、この岩がペテロであって、ペテロとはローマ教皇の第一代としてのペテロの意味である。結局、この岩はローマ教皇である、と主張する。これに対して、プロテスタント側の神学者は、この岩は、十二使徒全体を代表してペテロが告白した、僭仰告白そのものであると主張する。このような対立する二つの解釈に対して、クルマンがその著「弟子、使徒、殉教者なるペテロ」の中で述べていることは中々新鮮味をもっていて、相当具体性をもって迫るように感じられる。クルマンによると、イエスの御在世の時期において、ペテロが十二弟子たちのスポークスマンであったとは、よい意味でも悪い意味でも言えるが(三)かれが十二弟子の「指導者」であったとは言えない、と言う。使徒行伝の時代ことにその前半において、ペテロはエルサレムを中心とする教会で、ある意味で相当有力な指導者であったことは一般に認められる。しかし、それにしても、ある程度までの指導権しかもつていなかった。それは「教権」と言うようなものではなくて、自然の中に盛り上り、衆目の見るところによって、指導的位置にあるようになった、と理解すべきである。

しかし、それにしても、ペテロの位置は絶対的に強力なものでなかったことを、クルマンが次のように説明する。ユダヤ人キリスト者の宣教のわざがエルサレムに依存している限り、ペテロはその指導者であった。しかしそれは、パウロが異邦人キリスト者たちの組織者であったのと同じ意味でペテロがユダヤ人キリスト者たちの組織者であったと言うだけのことである。そして、ペテロがユダヤ人キリスト者たちの組織者あるいは指導者であったと言うことはその働きがエルサレムに依存しているからである、とまでクルマンは主張する。(四)そこで、クルマンが認めるようなペテロの指導性の限界を十分に認めた上であるならば、われわれは、ルカ福音書二二章三一—三四から、使徒行伝一章一五、二章一四などを読むと、原始教会ことにエルサレム教会においてペテロが指導者であったとは教理的なドグマとして理解されるべきことではなくて、あくまでも、歴史的現象として理解されるべきことである。ペテロはエルサレム教会で、ある程度まで指導者としての役割りを果たした。その意味でかれは「岩」であったと言えるが、それは神学的内容をもった言葉であるよりは、多分によい意味でのユーモアを含んだ言葉であつたらう。それ故にこそ、マタイ福音書は、ペテロ個人に関する幾分エピソードのごとき性質をもつ、マタイ福音書一六章一七—二〇の句を保存したがマルコやルカはそのようなエピソードの資料を持ち合せなかつたのではあるまいか。

いささか、本論から離れることになるかも知れぬが、神学的に論ずるならば、福音の本質から見て、教会の土台はペテロでもパウロでもヤコブでもなく、むしろイエス・キリスト御自身であると、パウロと共に言わざるを得ない。コリント一書二章一〇—一五参照。この意味で、教会の岩が信仰告白であると解するプロテスタント教会一般の解釈はいささか狭いのであるまいか。信仰告白の理解の仕方にもさまざまのものがあるので、岩はむしろキリストであると解釈する方がはるかに妥当であらう。

註

イエスは教会を建てたか

- (1) Stauffer, *ibid.*, pp. 154-155. The metaphor of a building had a history which stretched far back into the usages of the ancient East. We know of Iranian myths of the tower of the first king Yima; and of Babylonian traditions of a world tower, a rock building and the like. The principal thing in the O. T. is Zion, the holy city with its temple on the holy mountain, a sign that there is the people of God. (cf. Matt. 4 : 5; 5 : 35)
- (2) Schlatter, *Der Evangelist Matthäus*, S. 506. da die Arbeit Jesu in Galiläa zu Ende ging und die Wanderung nach Jerusalem bevorstand, erneuerte ihm (Petrus) Jesus sein Apostelamt. Es war für Petrus etwas völlig Neues, dass er der Apostel des Gekreuzigten werden soll.
- (3) Cullmann, *Peter, Disciple, Apostle, Martyr*, p. 30. This does not mean, however, that during the life time of Jesus he possessed the role of leader in relation to his fellow-disciples. He is rather at all times their spokesman, their representative in good as in bad action.
- (4) Nevertheless, in this position as leader of the Jewish Christian mission Peter was dependent upon Jerusalem. (p. 43, *ibid.*)

V

マタイ福音書一六章一七―二〇の解釈をめぐってなされる論点の一つは、この「ケバ」が個人を指すか、それとも十二弟子なる集団全体を指すか、と言う問題である。プロテスタント側では、「一五節の「あなたがたは」 *hymeis* de が複数形において問いかけられているから、一六節の「シモン・ペテロが答えて言った」なる信仰告白は、シモン個人のそれではなくて、十二人の弟子全体の信仰を代表して、いわば、スポークマンとしての発言をしたに過ぎないと言う。まさに、その通りである。

しかし、この個所で、ケバ(岩)が単数であるのに、弟子全体を意味していたか、否か、と言う論争よりも、イエ

スが多く、弟子たちの中から十二人を選び出して、これと恐らく寝食を共にして、これを福音の真理において教えたと言ふ事実に注意を向けなければならぬ。イエスは、カイザリア・ピリピにおいて、たまたま弟子たちに向つて、このような問いを發したのではなくて、学校にたとへば、數年間教育した学生に対して、卒業試験をするような意味でイエスは弟子たちの信仰をテストしたと理解される。このことと教会の建設とは深い關係をもっている。

十二弟子のことを一般には十二使徒と呼ぶことの方が通例のように見えるかも知れぬがマタイとマルコの福音書には「使徒」なる語が僅かしか用いられていない（マタイ一〇章二。マルコ六章三〇。ルカ一三、九章一〇、一一章四九、一七章五、二二章一四、二四章一〇）。十二人が使徒と呼ばれたか弟子と呼ばれたか、と言うところに大きな問題はなく、むしろ、イエスが「十二人」を選んだところに重大な意味がある。言うまでもなく、十二人はイスラエルの十二部族に照合する數である。古いイスラエルとは區別される、新しいイスラエルを再組織するために十二人の弟子は選ばれたのであった。

十二弟子たちの使命をマタイ福音書のみによって理解すると、少くとも次のような例が取り上げられる。

一〇章以下の中で

「イスラエルの失われた羊のところに行け。行つて、『天国は近づいた』と宣べ伝えよ。病人をいやし、死人をよみがえらせ、らい病をきよめ、悪靈を追い出せ。」

二八章一八以下で

「あなたがたは行つて、すべての國民を弟子として……あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るようになつてよ。」

ここで、三つの動詞に注意を払いたい。すなわち「宣べ伝える」こと、「教える」こと「医すること」である。

イエスは教会を建てたか

イエスは教会を建てたか

イエス御自身がなさったことについて、マタイ福音書は四章二三に次のように要約したことをも、ここで、考え合
せたい。すなわち、

「イエスガリラヤの全地を巡り歩いて、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病氣、あらゆる
わずらいをおいやしになった。」

ここでもイエスのわざは「教える」ことと「宣べ伝える」ことと「医す」こととの三つであった。

「宣べ伝える」*Keryssein* ことによく似た語に「福音を宣べ伝える」*euangelizein* なる語もある。前者は、主として
悔い改めを迫るように告知することであり、後者はすばらしいニュースを告知することであるが、いずれにしても、
一般の人々に公然と告知してまわることである。この語を英語で単に *Preach* と訳したのでは半分も意味が通じな
い。宣べ伝えるとは、街頭に飛び出して、それこそ大きな鐘でも打ち振りながら、叫んで歩くことである。下品な訳
でもよければ、「どなって歩いた」と訳してもよからう。大事件があったと、号外を散布してまわるような光景を想
像すればよい。(1)

「教える」*didaskain* とは、その場で直ちに悔い改めを迫らなくても、相手に時間を与えて、神の国の福音の真理を
理解させることを意味する。ヒブル語では *limmed* なる語を用いるが、それは *lamad* すなわち学ぶことをさせるの
意味であって、慣わせるの意味である。弟子たちとは「学ぶ者たち」*mathetai* とギリシヤ語で言うが、それは *ma-*
rhano するもの、すなわち、学ぶ者、あるいは、慣れる者の意味であって、ヒブル語の *lamad* は学ぶの意味である
が、それをなす者たちである。福音は *good news* あるいは *big news* として、大声によって、告知され、宣伝され
るのみならず、ひそやかに、静かに、弟子たちに「教え」られるものでもある。(2)

第三の「いやす」なる語と共に「宣教」および「教えること」に含まれない、一切の愛の行為、奉仕のわざを含め

たい。イエスにおいては、神の國は宣べ伝えられ、その真理は教えられる、と共に、そこではいつも病める者がいやされる奉仕の場である。イエスは、けっして「宣教」一本でなさらなかった。弟子たちに対しては「教える」ことをされ、一般の人々に対しては「いやし」の奉仕をされた。そして、この三つのわざを、その弟子たちにもせよと命じられた。宣教（ケーリユグマ）は、それだけでも存在するが、しばしば「教えること」（ディーダケー、あるいは、ディダスカリア）の形をとる。また、宣教は「いやし」の形をとることがある。

その場合宣教の手段として「いやし」が採用されたのではなく、宣教の本質はいやしなのである。十二弟子の本来的な活動を以上のように、「宣教」（ケーリユグマ）と「教えること」（ディダケー）^(三)と「奉仕」（ディアコニア）との三つの総合として把握するとき、初めてキリストの教会が正しく建設されて行くのではあるまいか。

マタイ福音書一六章一八の「岩」を単に「信仰告白」であると解釈する人々は、教会をもつて、単にケーリユグマの集会とのみ理解する近代プロテスタントイズムの思考形式による教会観に立つ人たちであると思う。われわれは、近代において「宣教」一本に分化しすぎた教会の理解の仕方をもう一度、聖書的な総合的な「宣教—教—奉仕」と言う教会観にかえりたいと思う。^(四)

イエスは、弟子たちの集団を用いて、かれの体なる教会を建てたもうた。

註

(一) 旧約で *Kerusein* は *qara* (rou) の訳として用いられている。創世記四一章四三、出エジプト記三二章五、列王記下一〇章二〇、歴代誌下二〇章三、エステル書六章九、一一、箴言一章二一、八章一、ミカ書三章五、ヨエル書一章一四、二章一五、三章九、ヨナ書二章二、三章四、五、イザヤ書六一章一、ダニエル書三章四。以上いずれも七十人訳による。

旧約で *euangelizein* は *basar* の訳として次のような個所に用いられている。サムエル書上三二章九、同下、一章二〇、四章一〇、一八章一九、二〇、二七、三一、列王記上一章四二、歴代誌一〇章九、詩篇三九篇三九篇九、六七篇一一、九五篇二、ヨエル書

イエスは教会を建てたか

イエスは教会を建てたか

二章三二、ナホム書一章一五、イザヤ書四〇章九、五二章七、六一章六、六一章一、エレミヤ書二〇章一五。

(二) 旧約で *didaskhein* は *limned* の訳として用いられたが、次のような個所に見出される。申命記四章一、一〇、一四、五章三一、六章一、一七章一九、二〇章一八、三二章一九、三三章四四、詩篇一七篇三四、二四篇四、五、九、三三篇一一、五〇篇一三、七〇篇一七、九三篇一〇、一二、一一八篇一二、二六、六四、六六、六八、九九、一〇八、一二四、一三五、一七二、一三篇一二、一四二篇一〇、一四三篇一。その他にもあるが、省略する。

(三) *ディアコニア diakonia* は「奉仕すること」であり、新約では執事職の意味にも用いられているが、ここでは、人の子がしもべの形をとつて罪人に奉仕された、と言うような、キリスト論的な「奉仕」の考え方から発して、教会の愛（アガペー）のわざを具体的にはディアコニアとして表現した。これは最近の神学界の用語となりつつある。

(四) 近代において、分化した教会の概念の一例として、一五三〇年に書かれた、アウグスブルグ信仰告白における教会の定義を引用した。 *Item docent quod una Sancta Ecclesia perpetuo mansura sit. Est autem Ecclesia congregatus Sanctorum (Versammlung aller Glaubigen) in qua Evangelium recte (reim) docetur, et recte (laut des Evangelii) administrantur Sacramenta. 〃〃〃* 古典型的な定義は確かに正しい。ただし、それは、ローマ・カトリック教会へのポレミクとしてである。しかし、異教社会の中に置かれている教会として、それは、宣教と礼典とのみが教会の本質であると言う定義では不十分である。ここに、教会が主としてケリーユグマの団体として分化し、ディアコニアの団体であることを、次第に必要としなくなった近代教会の姿が反映しているように思われる。アウグスブルグ信仰告白は、教会を依然として、信仰告白の上にて建てられた団体と見ているようである。これに反して、新約聖書およびそれに続く時代の教会は、宣教・教え・奉仕なる三本であつてしかも一本なる建て方をもっていた。